

過敏性腸症候群に対する催眠療法と大腸内視鏡検査

オランダの研究グループは、一次または二次治療を受けている成人の過敏性腸症候群（IBS）患者を対象に、催眠療法の有効性を検証する多施設ランダム化比較試験（RCT）を実施した結果を *Lancet Gastroenterol Hepatol* 誌に報告しました。



催眠療法は 45 分のセッションを週 2 回、6 週間行いました。また、催眠療法士は患者自身の力で痛みや不快感の軽減のために消化器系をコントロールする手法について助言し、毎日 15 ～20 分間、自己催眠訓練を行うための CD を配付しました。



催眠療法群では、対照群よりも IBS の症状軽減に効果が見られ、オッズ比は、3 カ月後で 2.9 (95%CI 1.2～7.4、 $P=0.0240$)、12 カ月後で 2.8 (同 1.2～6.7、 $P=0.0185$) でありました。



IBS の確定診断には、大腸内視鏡検査などにより、大腸がんや炎症性腸疾患などの器質的疾患を除外する必要があります。